

レトロ口映写会

中村 龍介

八月末、オーストラリアで看護師をしている長女の恭子が冬休みをとって帰って来た。こちらでは夏休みだが、あちらでは季節が逆なので冬休みだ。

恭子はチャレンジ精神旺盛な性格。大学卒業後、運輸会社に就職したが、四カ月後に退社。その後は、外資系や印刷会社に勤務した。二十六歳の時、結婚を機に退職し、今度は夫婦で競走馬の調教師になった。が、二年後には離婚、一人で自営のデザイナーを始めたものの長続きせず、人材派遣会社に登録し、ITベンチャーや外資系の文具会社等を転々。最後は外務省に採用され、広報部でホームページの制作を担当していた。

ところが五年前、何を思ったのか、外務省も退職して、オーストラリアで看護師の勉強をしようと言いだした。医療はこれまで全くの未体験分野。一体何を考えているのか。この時ばかりは、父親として娘の真意を確かめずにはいられなかった。

彼女の言うには、年齢的にも四十を過ぎ、この先長く勤めるためには専門職しかなく、看護師なら年齢を理由に解雇されることはない。また、日本ではバイリンガルの看護師は非常に少なく、帰国後も厚遇されるチャンスはある。しかも、他人に優しく接することは自分に欠けていた。人間として成長するためにも、是非この分野に挑戦したい。背水の陣を覚悟で頑張る、と決心は固い。

そこまで言われると、父親としても、毛利の殿様ではないが「そうせい」と答えるしかなかった。

恭子は、既にネット等で十分な下調べをして、留学先をアデレードにあるF大学の看護学科と決めていたようだ。段取りよく身辺整理を済ませると、二〇一一年二月、オーストラリアに移り、四十二歳の新たな挑戦が始まる。

その後の経緯は、恭子が現地から発信するブログにより逐一把握できた。まるでドラマを観るように一喜一憂させられたが、概ね順調に推移してきた。優秀な成績で、計画通りF大を卒業、一年足らずの看護実習にも合格して

二〇一四年一月、正看護師（RN=Registered Nurse）の資格を取得した。

全く未知の世界で、難解な医学英語を習得して、三年間という最短期間でプロの正看護師にまで到達した、我が娘の快挙に父親として快哉を叫びたい。

その恭子が二年ぶりに帰国したのだ。一家を挙げて歓待すべく、家族全員に集合をかけた。

八月最後の日曜日、三女の一家四人を含む計八人が一堂に会した。折しも前日は恭子四十七歳の誕生日。ハッピーバースデーを兼ねることにした。

これに先立ち、ファミリーパーティーの余興に何をやるうかと頭を悩ませた挙句、我々のドイツ駐在時代の古き良き思い出を再現することを思い立った。末娘の四女がドイツで誕生、一家六人が同じ屋根の下で暮らした六年間は娘たちにとつても思い出が詰まっているはずだ。が、三十年も経つと記憶は定かではないだろう。そこで、古い写真のアルバムを並べ、加えて、当時の家族の様子を収めた八ミリフィルムを上映する企画を立てた。題して『レトロ映写会』。

八ミリフィルムがビデオに駆逐されて久しい。トランクルームから三十年前のフィルムと映写機を引っ張り出して来てチェックしてみた。フィルムは何とかなりそうだが、映写機は駆動部のゴムベルトが経年劣化でボロボロになっていて使いものにならない。

『八ミリ映写機』のキーワードでネット検索してみると、いろいろ出てきた。その中で、我が家のものと同じ機種『ELMOK1000』の中古機をウェブ上に展示している業者を見つけた。『在庫三台』とある。

早速、メールで問い合わせた。丁寧な返事が来た。

「昔の部品を細心の注意を払って組み立てたもので、何度も試運転したが、問題なく使えます」とある。販売価格の三万円余りは決して安くはないが、一種のヴィンテージ商品なので仕方がない。購入手続きを取った。ついでに、通販のサイトで映写用のスクリーンも購入した。

数日後、ELMOの映写機が届いた。すごく奇麗で、まるで新品のようだ。電源を入れ、スイッチをオンにする。モーターの回転音とともに、勢いよく回るリールを確認。次に、フィルムを挿入して試運転してみることにした。

ウン？ リールは回転するのにフィルムを巻きとらない。もう一度トライするが同じこと。

「リールは回転し、フィルム先端は途中まで進むのですが、一向に巻きとれないのです。どんな原因が考えられるでしょうか」

メールで業者に問い合わせる。翌日には返事が来た。

「フィルムが経年変化で少し凹形に変形していることが考えられます。一度、先端部分を切り取って、新しく先端を作ってみてください」

こうして、何度かメールのやり取りがあり、私も映写技師として猛特訓を受けた。

いよいよ当日。一家八人が『アゼリア』に集合した。私の住むマンションには、小パーティーなどをやるための集会場がある。アゼリアと名付けられた集会場は二十畳ほどのLDKと十二畳の和室から成り、ホームシアターにも利用されるため、室内を真っ暗に出来る遮光カーテンも備わっている。予約しておくで貸切りで利用できる。

先ず洋室に座って出前の寿司で昼食、食後は、バースデーケーキで恭子の

誕生日を祝った。その後、和室に移動してレトロ映写会のスタート。

高校一年と小学五年の二人の孫は、目の前にある映写機をまるで博物館の展示物を見るように珍しそうに観察した。眼には好奇心が輝いている。

部屋の電気を消す。スクリーンに三十五年前の我が家が映し出される。

「あつ、この家、覚えてる！」

「恭子ねえちゃんだ。ちっちゃい！」

娘たちから歓声上がる。今は亡き妻が登場すると、

「お母さん、きれい！」

私が登場すると

「お父さん、若い！ 髪の毛がくろくろい！」

ヨチヨチ歩きの末娘の姿には

「かわゆい！ あつ、転ぶ、転ぶ、転んだ！」

想像した以上の反響だ。孫たちも初めて見る母親の幼い頃の姿に大喜び。

黙って観ていた三女の夫君も幼き日の妻の感想をポツリと一言。

「ずいぶん太ってたんだな」

二時間ほどの映写会の後、孫のリクエストでトランプ遊び。夕方には散会した。

その日の夜は、恭子、同居の次女、私の三人がお寿司と持ち寄った惣菜の残りもので簡単な夕食。その席で恭子が私に向かって言った。

「お父さん、今日はどうも有難う。とつても楽しかったわ」

娘のこの一言で、映写会に要した四万円ほどの投資も事前の猛特訓も十分報われたように感じた。

【二〇一五年九月記 原稿用紙約八枚 課題「映画」】

次頁に当日のパーティからスナップ写真を紹介

